

エマソンの超絶主義についての一考察

——透谷文学に対する思想的影響の前提として——

許 培 寛

近代哲学にあつては、超絶主義思想が時として既成の世界宗教の教理批判につながることは、なにもエマソンに限ったことではない。それはなぜなのか。超絶主義思想の中心的な考え方は、個人の心の奥には「神」が存在するがゆえに、各個人はそれぞれ宇宙の中心でもある。その一方で、自然にも「神」が内在するのであるから、あらわれとしての自然も神意の反映だとみとめられるからである。「神」の外在性が既成宗教と鋭く対峙する。このように、「神」を内在する個人であることからこそ、個人にとつては、「自我」の尊厳、すなわち自己信頼と自己尊重がもつとも重視されたのであつた。したがつて、超絶主義思想は「自我」の自立と尊厳をめざす一種の精神運動でもあつた。しかも、それは個人の神秘的体験を思想の核心に据えるものであるから、当然のこととして、既成宗教に支えられた個人の精神の形式と対立する傾向にあつたといつてよからう。

その中心人物がエマソンであり、彼はこの思想をより一層体系化し総合化するために、東西各種の思想を受け入れた。その範囲はきわめて広く、たんにヨーロッパの浪漫主義に対してだけではなく、東洋思想にも深く共感し、その理解と内容につとめた。しかし、彼は無批判に東洋と西欧にわたる各種の思想をとり入れたわけではなく、自己信頼という人間主義の基盤に立つてそれらの思想を再解釈し構築し直すことで、エマソン思想ともいふべき超絶主義思想を打ち立てようとした。ひるがえつて思うに、彼が各種の思想を涉獵したということは明治期の文学者北村透谷に似ている。たとえば、透谷のキリスト教批判をみてもわかるとおり、透谷の思想は仏教、キリスト教、儒教、道教、民俗信仰、そしてまたエマソン

ンの超絶主義というようなきまざまな思想を駆使して成り立っていた。こうした透谷の思索の方向性は個人の神秘的体験を重要な契機とする超絶主義的思想の傾向をもっていたのである。エマソンとかなりの共通点をもっているといつてよからう。

本稿では、透谷文学におけるエマソンの思想的影響を考察する前提として、エマソンの超絶主義の特徴、とりわけ、彼の理想主義と宗教体験に対して考察を加えることにする。

エマソンの超絶主義が北村透谷にとってきわめて大きな意義をもつのは、超絶主義と深く結びついた個人の「自我」の自立と尊厳にあった。超絶主義は既成の宗教を強烈に批判するエネルギーを内包していたが、それは同時に個人の精神における旧秩序を破壊する力をも秘めていた。透谷にとって、その破壊と新たな「自我」の確立は表裏一体の思想的営為であった。思うに、透谷の思想における超絶主義性とそれに支えられた「近代的自我」とは、透谷なりの思想的営為の帰結とみられる。しかし、そこにエマソンの超絶主義思想がどの程度及ぼしているのかを検証することは重要な課題である。そのためにも、両者の超絶主義の同質性と異質性を比較思想的に考察する必要があるところからしても、エマソンの超絶主義思想の検証は透谷文学研究にとつては欠かせないことであろう。

二

一般的にいって、理想主義者は現実を宇宙の源泉とみるとともに、自然を精神の表出とみる。それに対して、自然主義者は自然を現象とみなす傾向がある。ところが、それとは反対に、物質主義者は物質だけが真実であつて、意識を含めたすべての精神現象は物質の観点で説明できると主張する。このようないくつものイズムの対立のなかで理想主義をあらためて位置づけてみると、理想主義そのものが意識を根拠にして成り立ったものであるとみなされるところから、理想主義者はこの「意識」を物質と区別し、この意識の一番奥深いところを通して「神」に接することができるとう主張する。こうして、彼は「神」がたしかに存在し、またかれらの中心にこの「神」がいて、すべてのものはこの「神」の影にすぎないものと認識するようになる。

このような理想主義者として、エマソンは人間の意識の奥深いところを通して限らない真、善、美の源泉——それこ

それがエマソンにとつての「神」でもある。したがってそれは人文主義的な「神」といつてもよからう——を発見した代表的な思想家であった。このような思想の核心を直観した彼の意識は自立している。それゆえに、いかなる外部の権威によつて支えられるような精神の形式——というよりも、思想の形式といつた方がよいかもしれないが、——をみとめようとはしなかつた。エマソンの「神」が個人の「自我」と深く結びつくことはすでにふれておいたが、このような「意識」、すなわち精神の形式こそ「自我」の根柢ともなるものであった。そのことはかれの「Nature」の次の段落によくあらわれている。

As a plant upon the earth, so man rests upon the bosom of God: he is nourished by unfading fountains, draws at his need inexhaustible power. Who can set bounds to the possibilities of man?⁽¹⁾

エマソンの理想主義は「“unfading fountain”の流出」(または“the palace of eternity”のなかにいる)のような状態における内部生命の深淵の存在(実在)にもとづいている。それでは、エマソンが理想主義の源泉であるといっているその“unfading fountain”あるいは“the palace of eternity”とはどのようなものであろうか。それを追究することがエマソンの理想主義をあきらかにすることになる。換言すれば、それは彼の理想主義がどこにその根柢を置いているのかということでもある。

もしも人間が外部における「神」の存在と、そして自身のなかにおける人文主義的な「神」、すなわち精神の永遠性を直観する能力を持つとすれば、人間は彼自身のなかに超自然的なるものを見つけないならならぬ。この「見つけない」という実践を成就するために、人間は、そう、ここからはより即自的にわれわれは、といおう。その内部に存在する世界を見つめなければならぬ。エマソンの思想の探究はこのような方向性からのアプローチが最も有効だと考えられる。

エマソンは超絶主義思想を思索するにあたって、まず「自我」の一般論から始めて、人間性の普遍から個的体験へという方向へ思索は向う。すなわち、われわれが自身の内部の世界を省察してみると、二つの異なる世界のあることに気づかされる。いわゆる「内部の自我」と「外部の自我」がそれである。「外部の自我」は自我が外部にさらされている状態で、つねに外部の影響によつて動かされている。そのために、「外部の自我」は絶えず外部の力によつてその十全なる実現を

邪魔されている。それに対して、「内部の自我」は外部から遮断されているために、純粹で静かで平和な状態にある。しかし、それだからこそ、「内部の自我」は、より「外部の自我」の影響を受けやすい。それを比喩をもって言い換えるならば、「内部の自我」は目の前に置いてある事物をただ映している鏡のようなもの。それに対して、「外部の自我」はわれわれが自分の欠点に対する補償行為を反映するし、あるいはまた、また手にしてないものに対する渴望なども反映している。したがって、両者の関係は対照的であるといえよう。

エマソンは、若い頃から、この「内部の自我」と「外部の自我」に対して関心をもっていた。彼は一八四二年ボストンにあるマソニック寺院で演説した“*The Transcendentalist*”で人間の内部の二重性に対して次のように言及している。

The worst feature of this consciousness is, that the two lives, of the understanding and of the soul, which we lead, really show very little relation to each other: never meet and measure each other: one prevails now, all buzz and din; and the other prevails then, all infinite and paradise. ⁽²⁾

これによれば、人間の内部には「知的理解能力をもった私」と「神的知慧をもった私」が意識のなかに秩序立ったかたちで交差していると主張している。(2)での「神的知慧をもった私」とは、彼の“*the infinite of the private man*”⁽³⁾による限り「内部の自我」に相当するとみてよい。とすれば、すべての人間はその存在を支えている意識構造において共通しているという。それに対して、「知的理解能力をもった私」とは「外部の自我」にあたり、個人の個別差の根拠となっているという。

エマソンはまた“*Plato: or, the Philosopher*”のなかで「精神 (soul)」を以下のように規定していることも、「神的知慧をもった私」すなわち「内部の自我」に対する彼の思索をたどるために参考となる。

It is soul — one in all bodies, pervading, uniform, perfect, pre-eminent over nature, exempt from birth, growth, and decay, omnipresent, made up of true knowledge, independent, unconnected with unrealities, with name, species and the rest, in time past, present, and to come. The knowledge that this spirit, which is essentially one, is in one's own and in all other bodies, is the wisdom of one who knows the unity of things. ⁽⁴⁾

エマソンによれば、人間の精神は、「聖なる直観」を媒介にして遠くギリシア哲学でいう、永遠でまた絶対真実そのものである「イデア」に通じている。われわれはこの「聖なる直観」によって物事を凝視するようになると、そこにおいて始めて内在する真実を発見することができるというのである。そうして、そこにまで到達すると同時に、「見えるもの」と「見えないもの」、また「主体」と「客体」といった区別が消えて主客はひとつに統一されてしまう。エマソンはこう主張するのだが、この主客合一の認識論については、より具体的に“*The Over-Soul*”（*宇宙の霊*）で言及される。

Meantime within man is the soul of the whole: the wise silence: the eternal One. And this deep power in which we exist and whose beatitude is all accessible to us, is not only self-sufficing and perfect in every hour, but the act of seeing and the thing seen, the seer and the spectacle, the subject and the object, are one. We see the world piece by piece, as the sun, the moon, the animal, the tree, but the whole of which these are the shining parts, is the soul.⁽⁵⁾

この言説によれば、永遠なるもの、すなわち「神」あるいは「イデア」が人間の内部に見すえられるとき、理想主義は真にわれわれを支える無限の根源となるという。したがって、きわめて端的な言い方をすれば、エマソンの理想主義の志向するところは、この有限なる精神のなかに無限なるもの、すなわち「神」ないし「宇宙の霊」を探し出すことであつたといつてよからう。

このような特色は彼の「*霊*」(the soul) に対する観念によく現れている。エマソンにとつて、「*霊*」は尽きることのない人間性の源泉であり、「*霊*」のなかでは「*神聖*」「*良心*」「*同情心*」「*霊性*」などの属性がそれぞれの特性を持つて人間性のうちに内在しているのである。それゆえに、人間性として現れる優れた才能、徳、愛などは、それぞれ知と意志、そして情などを通して表出される「*霊*」そのものの現象にすぎないのであつて、人間はこの「*霊*」の存在を感得しなにかぎり、自分自身の内部に隠されている人間性のもつ可能性を知覚できずに生きていかなばならないことになる。エマソンはこれに対する見解をさらにこう述べている。

What we commonly call man, the eating, drinking, planting, counting man, does not, as we know him, represent himself, but misrepresent

himself. Him we do not respect, but the soul, whose organ he is, would he let it appear through his action, would make our knees bend. When it breathes through his intellect, it is genius; when it breathes through his will, it is virtue; when it flows through his affection, it is love. And the blindness of the intellect begins when it would be something of itself. The weakness of the will begins when the individual would be something of himself.⁽⁶⁾

エマソンが意図した理想主義は、人間の内部において「永遠なるもの」と「現象として現れるもの」とを統合することであった。そのためには、人間性の内奥において神との交感が果たされて始めてその統合は可能なものであった。エマソンにとって、神とは「宇宙の霊」(“The over soul”)にほかならない。したがって、「永遠なるもの」を認識することは人間が自分自身の内部に回帰して、その奥深くに隠されている自分自身の「霊」というものを自覚すること以外にはありえない。

こうして、人間は、自分自身の「霊」の知覚を通して始めて宇宙の「霊」(“The over soul”)と一致することができ、人間の理想主義は自我の内部を突きつめることで「霊」の实在の確信に至る。人間内部の「霊」を「霊」たらしめているものこそ、神すなわち「宇宙の霊」(“The over soul”)であった。それゆえに「宇宙の霊」は实在する。このような神秘主義にかたよっている点にエマソンの理想主義の特色があるといつてよからう。

三

エマソンの神秘主義は論理的言説をもつてしては説明しにくいことがひとつの特徴だが、その理由としては、それが体験を通してしか知覚しえないとするからであろう。つまり、エマソンはみずからの個人的体験にもとづく思索によって日常性からみずからを解放しようとする。すなわち、その体験によってこそ彼は日常関係しているいろいろな事柄から解放され、それによって彼の精神は浄化され、究極の真理を悟り完全な存在になるとする。エマソンは「霊」の感得による論理的展開の必然として、このような宗教体験ともいえる神秘主義経験を強調するようになる。*“Nature”* にはそれに対する記録がある。

Standing on the bare ground, — my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space, — all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball. I am nothing; I see all; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.⁽⁷⁾

ここでわかるように、エマソンのいう「宇宙の存在」とは、彼の宗教体験に根拠づけられている。ただ、この宗教体験そのものがエマソンの超絶主義の思想において、最も問題点となることはのちにふれよう。ともかくもその宗教体験という点では、純粹に哲学の思索を通してという知的思考によって獲得されるプラトンの「イデア」とはその性格が異なる。エマソンの神秘体験は肉体と精神における純粹な宗教的体験であって、そのことを最も単純に言ってしまうえば、人間が彼の心の奥深いところで神と接触している状態を意味する。それはいうまでもなく、体験（行為）であって知識でも観念でもない。

エマソンの神秘体験は、論理的にはあくまでも「宇宙の霊」との交感という意味でしかなく、単純きわまりない言説でとらえられるにすぎないが、ひとたび体験（行為）のレベルに置くならば、困難な問題をはらむことになる。それはなにかといえば、個人の体験としてこの心の深淵に至ることはそうたやすいことではないということである。そこに至る道は、比喩的にいえば、狭くて暗くて危険な道なのである。もしもわれわれがこの暗い内部世界を探検しようと思うならば、必ず自己の内部にひそんでいるエゴイズムと対決しなければならぬ。心の深淵にいたる困難さとはここにある。この障害物はいつもわれわれが内部世界に至ることをさまたげる。

そのために、エマソンはこの内部世界に至る手段として、可能なかぎりエゴイズムを抑圧する精神修養を強調した。その最大の実践が禁欲であった。こうして、禁欲生活を通じてわれわれの心は浄化され、誘惑しているすべてのものに対する執着から離れられるというのがエマソンの哲学の実践であった。したがって、この過程は彼のいう神秘体験に入る準備過程にもなる。“Literary Ethics”にこのような修養に関する言説がみえている。

By this discipline, the usurpation of the senses is overcome, and the lower faculties of man are subdued to docility; through which, as an unobstructed channel, the soul now easily and gladly flows.

The good scholar will not refuse to bear the yoke in his youth; to know, if he can, the uttermost secret of toil and endurance; to make his own hands acquainted with the soil by which he is fed, and the sweat that goes before comfort and luxury.⁽⁸⁾

これによれば、エマソンの強調した禁欲主義は、もともとエゴイズムが生来のものではなく、禁欲的修養によって取り去ることが可能だという考え方にもとづいていることがわかる。では、エマソン自身はどのような宗教体験（修養）をしていたのであろうか。それについて調査してみると、意外なことに、彼の著作には、彼が修養を実践して宗教的体験に至ったというような言説はどこにもみえていない。なぜなのだろうか。おそらく、そのような宗教体験に代わるなにかを彼が実践していたからではなからうか。そのように考えるとき、注意すべきことがある。それは、無神論者であった彼がつねづね「一日のすべての瞬間を充分にあじわい、苦痛を愛せよ。」と強調していたことである。その行為が人間に自分自身の内奥を見つめさせると信じたのである。

このことばのうちの「苦痛を愛せよ」ということについては、彼の経歴が深い影を落としていると考えられる。エマソンは幼いときに父を亡くし、母が貧しい生活のなかで彼と家族を守ってきたのであった。しかも不幸なことに、エマソン自身、少年期に結核にかかり、また眼病は彼を失明の危機に追い込んだ。しかも、兄弟の一人は精神異常者で、一人は結核で死んだ。成人したのちも、彼の最初の妻は結婚二年にして亡くなり、奉職した教会では、伝統であった儀式を否定したために免職になった。そんななかにあつて不幸は重なった。なによりも愛していた五歳の息子をも亡くしてしまったのである。

われわれは不条理なかたちではあるが、彼の楽天主義が以上のような彼の悲惨な経歴にもとづいているところが大きいことを理解することができる。したがって、その楽天主義を裏打ちしている彼の経歴が「苦痛を愛せよ」ということばに凝縮していることを見逃してはならないのではなからうか。彼が結核の養生のためにフロリダに行ったとき、「苦痛」について思索をめぐらし、

He has seen but half the Universe who never has been shown the house of pain.⁽⁹⁾

と述懐している箇所に注意する必要がある。この述懐は仏教でいう「無常」(＝すべてのものはかないもので、一時的なものである)という思想を連想させる。かれの経歴に重くのしかかっていた多くの苦しい体験を通じて、エマソンは自己本意としてのエゴイズムと執着を放棄し、自己の心を浄化させたともいってよいのだが、その思索の過程で得られた体験の昇華が仏教という東洋思想の「無常」に想到したといつてよからう。こうして、その浄化された心の内部において究極的真理(「永遠なるもの」)に接することが可能だと確信したのである。

四

エマソンは超絶思想との親近感およびその思想の類似性から東洋の神秘思想に対して関心をもっていた。とくにヒンズー教の影響を受けたことはよく知られている。ただ、彼自身はヒンズー教の多くの教理と実践を仏教的なものと誤って認識していたらしい。そのために、かれの思想は仏教よりはヒンズー教に近いというのが実際であった。彼のいう“Over-Soul (大霊)”思想はヒンズー教(とくにウパニシャッド哲学)の“Brahman”“Atman”(日本仏教では「大我」と訳される)に似ている。ただ、ウパニシャッド哲学を共有する原始仏教においても、“Brahman”と“Atman”は靈魂不滅説の重要な根拠となる実体観念であったことはいままでもない。そのようなところにエマソンの誤解があったようである。

ただし、原始仏教においてはそれらの観念は「空」の認識から否定されるべきものであったことは述べておく必要がある。それ以外にもヒンズー教の教理には仏教に類似した考え方がいくつかみえる。たとえば、「自然は固定しているのではなく流動するものである。」¹⁰⁾とか、「無は全てでありまた全ては無である。」¹¹⁾とかいう言説は仏教の「空」の認識とどれほど距離があるといえようか。したがって、エマソンが両者を誤解して受容したことも、ある意味では無理がなかったといえよう。

一般的に仏教では、水に映る月はこの手に捉えることができないという比喻でよく知られているように、真理は言葉で表わせないといっているが、エマソンも、すでにふれたように、これと同じ観念をもっていた。

My words do not carry its august sense; they fall short and cold ... In past oracles of the soul the understanding seeks to find answers to sensual questions, and undertakes to tell from God how long men shall exist ... An answer in words is delusive. (127)

彼にとつて、「真実」とは言葉を超えた実在であった。彼は「Samsara」（苦の世界）と「Nirvana」（涅槃、仏陀の寂滅）とは違わないと考えた。原始仏教においては、「涅槃」はブッダの悟りの究極の表現であった。それゆえ、悟りに達したブッダの境域そのものが「仏国土」（そのひとつが阿弥陀如来の仏国土としての極楽浄土である）であると信じられた。エマソンは、おそらくヒンズー教の教理を介してであろう、この原始仏教の思想を受容し、「極楽は今われわれが存在する（こ）にある」といつてゐる。「Samsara」と「Nirvana」の一致を説く彼の主張がここには見える。この思想は原始仏教でいえば、「色即是空」というところにもとづくのかも知れない。ただ、この思想をもしても現在の日本の日本の仏教思想でいえば、十三世紀以後京洛の比叡山を一大拠点とした天台宗の本覚思想における〈聖即俗〉という觀念に類似する。〈聖〉とは「極楽」、「俗」とは「われわれが存在する（こ）」である。彼は続けてこう述べている。

But the soul that ascends to worship the great God is plain and true; has no rose-color, no fine friends, no chivalry, no adventures; does not want admiration; dwells in the hour that now is, in the earnest experience of the common day ... by reason of the present moment and the mere trifle having become porous to thought and bibulous of the sea of light. (14)

エマソンの強調した日常生活の時間觀念と存在性は原始仏教でいう「刹那」の思想とよく似ている。「刹那」とは一秒の1/16というきわめて短い時間の単位とされている。それを基盤とする「刹那」の思想とは、時間の流れが「刹那」という、いわば電気信号のパルスのごとき連続であるときみなされる。したがって、現在の「刹那」のみが有であつて、その前後の「刹那」は、一方はすでに消え去り、もう一方はいまだ現れていない以上は無である。しかも、現在の「刹那」も1/16秒のうちには無に転化するのであるから、結局のところ、事物は時間の流れとしての有という存在ではなく、瞬間に変化するから「空」なる存在である。エマソンによれば、日常生活において価値があるものは現在の自分だけであり、過去や未来のいかなるものも現在に無関係ならば価値がないものであつた。それこそまさに原始仏教の刹那思想の日常的

レベルでの解釈であったといってもよいものであろう。

エマソンは続けて「主体と客体は同一である。」と主張した。¹⁵⁾これは主体と客体の指定を否定する禪の原理に似ている。禪における「直指人心」という言葉が代表するように、「人心」の内なる現象（色）に客体を見るとすれば、心象としての客体は「空」なるものとする唯心論としての禪の原理からすれば、主体と客体の区別などはありえなかった。エマソンが主客合一論に傾いたことは、彼の「大霊」の思想から容易に読みとることができる。宇宙の原理たる「大霊」はあらゆる存在に「霊」として分流しているとされる。つまり、人間もその内奥に存在する「霊」を通して「大霊」の分霊であることを自覚するとき、主体と客体はいずれも同一の「大霊」の分流にすぎないことになる。そこに主客の対立など存在するはずがないというのがエマソンの主張であらう。

こうして一層、東洋の神秘主義に傾斜することになったエマソンは、ヒンズー教の教理の底を流れるインドの民族信仰の核心であるカルマ（業）と出会うことになる。それは彼のいう「原因によって結果が生じる」という因果論がまさに Karma（業）思想の受容であることからいえる。というのは、原始仏教における過現未の隔世にわたる因果論は、*Paṭisambodhi*（業）という概念にもとづいてこそ成り立つ思想だからである。また彼は「存在は正しい」と主張した。俗なるものはすべて聖なるものであった。

Those roses under my window make no reference to former roses or to better ones ... they are for what they are: they exist with God today. There is no time to them. There is simply the rose. ¹⁷⁾

このようにエマソンの神秘主義には、原始仏教やヒンズー教の宗教体験と類似する超絶体験、あるいはまた、それらの宗教における身体と時間にかかわる固有の思想と多くの共通点をもっている。しかし、ただたんに仏教的知識を知っていることと、真実を自分の内部に体現することを通して、いわゆる宗教的な悟りに近づくという点とはレベルの異なる問題であらう。

エマソンの思想と宗教的な（行）との差異がここにはつきりと認められるようになる。ここからはそれを追究してみよう。まず彼の超絶主義の理想はすでにふれたように「Over-Soul（大霊）」と自身の「Soul（霊）」の融合であったこ

とはいうまでもない。それは、確かに、原始仏教の悟達の境域とよく似ている。ヒンズー教において悟りに至った時の“Brahman”“Atman”との合一は、彼のよく知っていた観念であつたろう。しかし、彼の叙述には、彼が悟りを得たという証拠は見い出されない。それどころか、逆に批評家の William A. Huggard は彼の失敗を次のように証明している。

In his own inner awareness of a divine presence, in the mystic feeling of being possessed by an infinite being, Emerson found the most convincing of all signs. Since Emerson's Greek head was set on Yankee shoulders, it is doubtful that he ever experienced a mystic transport so ecstatic as those which have swept religious enthusiasts like Jonathan Edwards into dizzy raptures. (18)

Huggardによれば、悟りに至らなかつたということはエマソン自身もみとめているという。その点では、Ralph L. Ruskもエマソンの思想を次のように回想していることが注目される。

He saw both sides, weak and strong, of his philosophy. He had sharply contradictory moods. He could write a prose poem on the divinity of man: "... I grow in God. I am only a form of him. He is the soul of me. I can even with a mountainous aspiring say, I am God ..." Then, before he laid down his pen, he could confess: "A believer in Unity, a seer of Unity, I yet behold two." (19)

Ruskによれば、彼(エマソン)の認識がまた一つでなく二つ(「見るもの」と「見られるもの」として存在しているとすれば、彼は悟りには至っていないというべきであろう、という。確かに、エマソンの思想からすれば、悟りの状態において主客といった二つの区別はないはずであつた。つまり、仏教的なレベルからいえば、彼は宗教的実践としての悟りを得るのに失敗したのであつた。結局のところ、このことはエマソンの超絶主義は哲学であつて、決して宗教ではなかつたということをおがわせるのであろうか。

五

エマソンは、人間には知的な認識能力を超えた靈的な知見能力があると信じた。物質的表象は「大靈」(Over-soul)の流出であり、また影である。完璧に宇宙を満たしている「大靈」は、また分靈して人間を貫いて流れていると彼はいう。それにまた、彼は有限な人間は直観によって無限なる神と合一できるとも語っている。このような神秘主義的な觀念論を述べる彼は、その神秘思想を人間の内部における「自我」を核として合理的な理論として体系づけようと努力した。しかし、その過程におけるエマソンの論理は矛盾としてあらわれ、自己中心的になっていったというべきであろう。その結果として思索はどうであったかといえ、彼は時に激励し、時に弁解しながら、実体をともなわない抽象論を振り回すだけで、具体的な解答を与えてはくれなかった。

この点は彼に影響を受けた北村透谷にとっても同じことであった。かれの作品はエマソンと同じく思索の挫折を伝えてくれている。しかし、透谷がエマソンの超絶主義の思想を受容したということは、明治期における近代国家の市民の精神と思想の革新をめざした透谷にとって絶大な思想的武器をもったといつてよからう。政治と経済、そして物質において急速な近代化をめざし、それに見合う近代国家の市民の創出を望んだ明治維新政府にとって、しかしながら、人間の内部における精神の革新という点については、換言すれば、近代人にふさわしい「自我」の確立という点については容易に成功しえなかった。近世封建社会の遺風である儒教や仏教などがかれらの精神、すなわち「自我」を呪縛していたといえる。エマソンの超絶主義の思想のイデオロギー性もしいえるとすれば、それが既成の宗教（儒教もそれに含められよう）の破壊にとって有効であったところにある。

仏教における「空」あるいは「仏陀」の信仰と、エマソンの超絶主義の「大靈」への確信がどう異なるのかといえ、当時の仏教が旧体制内にとり込まれるなかで、「空」や「仏陀」の教理のもつ能動性が去勢されてみずからはたらき出す力を失っていたのに対して、エマソン流の「大靈」が能動性を強くもつて個人の「靈」にはたらきかけていたことであろう。「大靈」の分出が個人に内在する「靈」であり、それが「自我」の根源であるとされる以上、「自我」はつねに「大靈」のはたらきかけによってのみ存在すると確信される。したがって、自然への交感がエマソンの処生哲学の理想であるのは、

まさに「大霊」のはたらきかけと「自我」との交感を意味するからであった。

透谷が激越なかたちで仏教や儒教のもつ旧思想を批判し得た背景には、エマソン流の超絶主義にもとづく「大霊」の影響を受けたことが指摘できる。エマソンによって「自我」の自由を支える近代哲学を導入した透谷には彼なりの近代人としての自我への確信があった。この思想を武器に透谷は近代国家の市民の精神の内に残る残滓を容赦なく攻撃したわけである。ただ透谷にとつて悲劇であったのは、エマソンの理想主義が「自我」の尊厳性とあまりにも深く結びついていたことによつて、自己中心的で求心的な方向に向いてしまい、普遍性を獲得できなかったことである。それゆえに、エマソンの理想主義と同じように、「透谷の「近代的自我」もまた外部に開かれる契機をもたなかった。したがって透谷にとつて、近代国家の形成期のなかで「自我」なるものが外部との関係においてどのような意味をもち、またどのような役割と位置を占めるべきなのか、その方向性については透谷自身にとつても不透明であったことであろう。

注

- (1) Emerson, The Selected Writings of Ralph Wardo Emerson, ed. Brooks Atkinson (New York: Modern Library, 1950), p.35.
- (2) Emerson, The Transcendentalist, p.100.
- (3) Emerson, Journals (April 7, 1840)
- (4) Emerson, Plato: or, the Philosopher, p.476.
- (5) Emerson, The Over-soul, p.262.
- (6) Emerson, The Over soul, p.263.
- (7) Emerson, Nature, p.6.
- (8) Emerson, Literary Ethics, p.148.
- (9) Emerson, Journals, II, 180 (1827)
- (10) Emerson, Nature, p.42. "Nature is not fixed but fluid."
- (11) Oliver Wendell Holmes, Ralph Wardo Emerson (New York: Houghton Mifflin, 1912), p.397. "nought is everything and everything is nought."

- (12) Ralph L. Rusk, *The Life of Ralph Wardo Emerson* (New York: Charles Scribner's Sons, 1949), p.260.
- (13) Emerson, p.217; Rusk, p.158. "Heaven is here and now."
- (14) Emerson, *The Over-soul*, p.274.
- (15) Emerson, *The Over-soul*, p.262. "the seer and the spectacle, the subject and the object, are one"
- (19) *Ibid.*, p.271. "the soul will not have us read any other cipher than that of cause and effect."
- (17) F. Paul Bolter, *American Transcendentalism* (New York: An Intellectual Inquiry, 1974), p.22.
- (8) William A. Huggard, "Emerson's Glimpses of the Divine," *Personalist* 36 (Spring 1955), p.175.
- (19) Ralph L. Rusk, *The Life of Ralph Wardo Emerson* (New York: Charles Scribner's Sons, 1949), p.216.